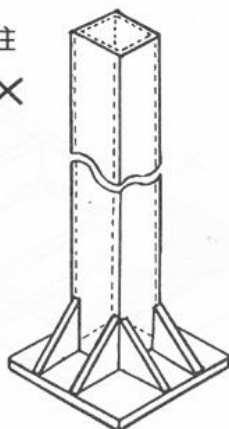


コーナー部以外のスカラップ

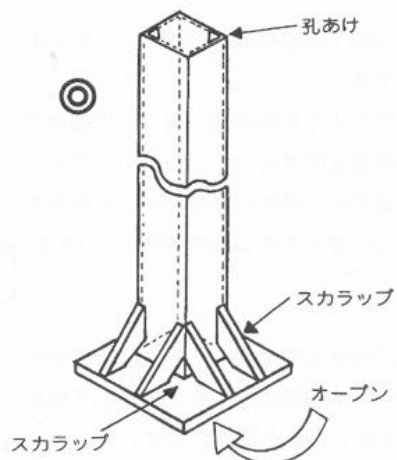
右図は角柱の例を表わしていますが、このような場合はスカラップをとるのはもとより、孔あけ、オープンなど総合的な配慮をすることが必要となります。

角柱

×

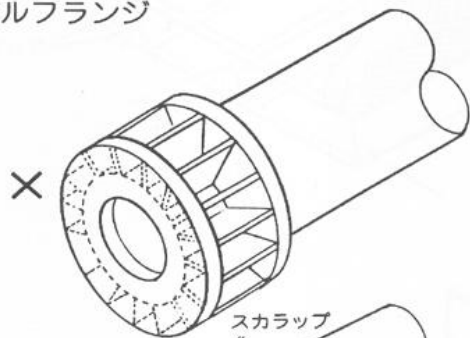


◎

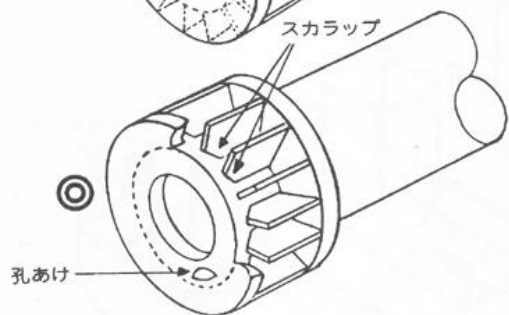


ダブルフランジ

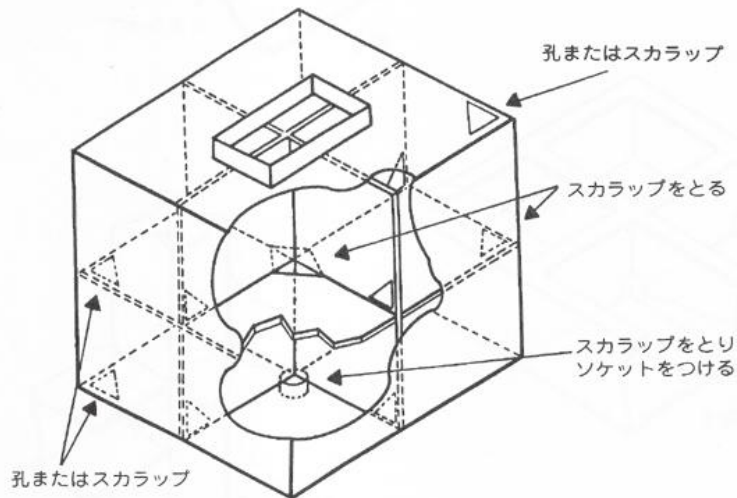
×



◎



内部が区切られている場合



左図は一般的なダブルフランジ構造の例ですが、スカラップのほかに底部フランジが管内面に対して、カエリとなり垂鉛の流出を妨げ、垂鉛の残留が生じますので、図の位置に孔あけが必要となります。

このように補剛などのために、内部が区切られた構造の場合には各室を独立した状態にしたままでは、各接合面や交差部あるいはコーナー部に空気だまりや垂鉛だまりができて、めっきが困難となりますので、図のように孔あけや、スカラップをとることが必要です。

また場合によって、斜めにしたたり反転したりしますので、つり手が必要となります。

